地域を支える 農業人 WAZABITO

PROFILE

加藤（かとう）　與志和（よしかず）さん（58歳）

海部郡蟹江町

常に消費者目線を忘れない

蟹江町にある有限会社みづほ園芸の代表取締役を務める加藤さんは就農して35年を迎えます。現在は2千坪の面積で、ポインセチアやポットマム、ブーゲンビリア、シコンノボタン、セイロンライティアなどをはじめ、その他にも様々な種類の鉢花を季節にあわせて栽培しています。また、蟹江町花き部会や海部苗木花卉生産組合連合会の会長としてもご活躍されています。

加藤さんが栽培で特にこだわっているのは、いかにして色の美しさを引き出すかということです。花が発色するためには紫外線が必要ですが、一般的に栽培に用いられるガラス製の温室は耐久性に優れる一方で、紫外線を吸収してしまう性質があります。そのため、生育や色づきを丁寧に観察しながら、適切なタイミングで紫外線を透過しやすいアクリル製ハウス等へのローテーションが行えるよう、どこにどの品種を配置すべきか常に気を配りながら栽培管理をしています。

今年の生育は冬の冷え込みも少なかったため順調だったそうですが、コロナ禍の影響で4月上旬から中旬は需要が大きく落ち込みました。現在は徐々に業界全体が持ち直しつつあるとのことですが、もともと花の需要は年々減少傾向にあり、生産コストも高騰し続けていることから、依然として厳しい状況が続いています。

今はどれだけこだわって作っても、市場に持っていくとサイズによって価格が決まってしまうことがほとんどとのことですが、加藤さんは「だからといって品質は妥協できません。たとえ価格には反映されなくても、『あそこの品質は間違いない』という周りからの目に見えない信頼を大切にしています」と話します。

花は消費者の嗜好の変化が急速で、売上を確保するためには流行に合わせた新品種の栽培が求められています。加藤さんはそんな時代の流れに順応しながらも、ブーゲンビリアやノボタンなどは、30年以上栽培し続けているそうです。その理由について伺うと、「目新しいものを作って、オンリーワンを追い求めるばかりではなく、従来からある品種も大切にし、消費者の方に買いたいと思っていただける質の高いものを作り続けることが重要だと考えています」と話してくださいました。

「自分にとって花は子どもみたいなものです。大切に育てた花をどんな人が買ってくださるのか、購入後はどんな環境で育てていただけるのかなど、出荷して終わりではなく、お客さんの家に迎え入れられた後のことも気になって色々と考えてしまいます」と笑顔で話す加藤さんから消費者の方に向けて、「愛知県は花の産出額では50年以上全国一位ですが、消費量はそれほど多くありません。コロナウイルスの影響で、在宅勤務やテレワークが広がるほか、新しい生活様式の実践が求められるなど、慣れない環境でのストレス増加が危惧されています。花を見て怒る人はいないように、花には眺めて楽しむ以外にも、目に見えない癒しの効果をもたらしてくれる魅力があります。ぜひ、新しい生活様式の彩りとして、花を一鉢でも一輪でも誰かに贈ったり、家庭で飾っていただけると嬉しいです」とメッセージをいただきました。

農業人